

新装版

# 翻訳英文法

訳し方のルール

○  
安西徹雄

## はしがき

最近、翻訳を勉強したいという人々が、非常にふえているようだ。翻訳の理念や技術を説いた書物は、おびただしく店頭に並んでいるし、各種の翻訳スクールが開講されて、どこも相当の盛況を呈している。実は私自身も、日本翻訳家養成センターのバベル翻訳学院に何年か前から呼ばれて、翻訳家志願の人たちといっしょに勉強しているのだけれども、そこでいつも悩んでいたことが一つあった。翻訳のノウハウを伝えるのに、適当なシステム、組織化の方法がなかなか見つからないということである。

翻訳という作業は、とにかく非常にこみいった、複合的なプロセスである。いろいろのレベルの判断を同時にくだし、総合的、多角的に処理してゆかなければならない。要するに、出たところ勝負的な要素が非常に多い。だから、誰かに翻訳のコツを教えるなどというオコがましいことを始めてみると、どこからどう手をつけていいものやら、途方に暮れてしまわざるをえない。結局のところ、徒弟制度的な実地訓練で、つまりは見よう見まね、経験とカンでわかってもらうより仕方がないということになる。なるほど、ある程度は一般的な原則のようなものを立てることもできなくはない。しかしそうした原則と実地の作業とが、なかなか結びつかないというまどろこしさがどうし

でも残る。なんとか翻訳のノウハウを、もう少し効果的に組織化する方法はないものか。しっかりしたシステムを持ちながら、しかも実地の作業に的確に役立つ整理の仕方はないものか。

実はこの本のアイディアは、この組織化に、伝統的な英文法の枠組みを利用してみようということなのである。つまり、名詞、代名詞、動詞(時制、法、態)、あるいは語法といった項目に従って、それぞれ、例えば名詞なら名詞を訳す時、翻訳上気をつけるべき点としてどういった問題があるかを、名詞の項目にまとめてみようというのである。こうすれば、あくまでも英語そのものに密着しながら、しかも、翻訳上のノウハウを明確に体系化し、いつでも必要に応じて参照することもできるのではないか。

この着想は、まことに秀抜なものだと思うが、実は私自身の考えついたものではない。雑誌『翻訳の世界』の編集長、杉浦洋一氏の原案である。このアイディアにのっとって、1980年の2月号から、17回にわたって同誌に書かせていただいた連載が、本書の骨子をなしている。けれども今回、単行本の形にまとめるにあたって、全面的に加筆し、改訂して、所によっては、一章全体を新しく加えた箇所もいくつかあるし、また、1981年の11月号から5回、「演習篇」と題して、同じく『翻訳の世界』に載せた練習問題も付け加えた。

いずれにしても、しかし、この種の翻訳論は本書が初めての試みなので、不備な点は、当然のことながら多々あるにちがいない。けれども、とにかくこの小さな本が、翻訳の勉強を始め

ようとする人たちに、多少なりとも参考になることを願っている。

本書の生みの親である杉浦氏をはじめ、連載の時からいろいろお世話になった『翻訳の世界』編集部の方々に、末筆ながら、心からお礼を申し述べて筆をおきたい。

1982年2月

安西 徹雄

# 目次

【はしがき】—— 3

●

●

●

序章—————語順の問題そのほか———— 12

§ 1—————【原文の思考の流れを乱すな】—— 12

§ 2—————【文体の問題】—— 17

§ 3—————【文法のテキスト】—— 18

●

●

I—————所有格を考える = 名詞(1)—— 20

§ 4A—————【主語を表わす所有格】—— 20

§ 4B—————【代名詞の所有格】—— 23

§ 4C—————【動名詞の意味上の主語】—— 24

§ 4D—————【of + 名詞(主格関係)】—— 24

§ 5A—————【「目的格関係」を表わす所有格】—— 25

§ 5B—————【of + 名詞(目的格関係)】—— 26

- II——「核文」と「変形」=名詞(2)——31
- § 6——【所有格構文の意味構造】——31
- § 7——【「核文」と「変形」】——33
- § 8——【翻訳のプロセスと「核文」】——35
- III——「無生物主語」その他=名詞(3)——40
- § 9——【無生物主語】——40
- § 9A——【動詞が内包されている場合】——41
- § 9B——【動詞を補ってやるべき場合】——43
- § 9C——【仮定法がふくまれている場合】——46
- § 10——【「形容詞+動作者(名詞)」の表現】——47
- IV——演習(1)=名詞——51
- V——代名詞は切れ=代名詞(1)——59
- § 11——【人称代名詞】——59
- § 12——【名詞の反復を避けるための *that, etc.*】——63
- VI——演習(2)=人称代名詞——69
- VII——関係代名詞をどうするか=代名詞(2)——78
- § 13——【接続詞を補う】——79
- § 14——【いったん切る】——82
- VIII——関係代名詞をどうするか(続)=代名詞(3)——88
- § 15——【分解する】——88
- § 16——【解体する】——91
- IX——演習(3)=関係代名詞——97

X	述語的に訳すべき場合 = 形容詞・副詞(1)	106
§ 17A	[No]	106
§ 17B	[Many, Few]	107
§ 17C	[Much, Little]	109
§ 17D	[Some]	110
§ 18	[文修飾の副詞]	111
XI	副詞に訳したほうがよい形容詞 = 形容詞・副詞(2)	116
§ 19A	[a little reflection の型]	116
§ 19B	[All, Every, Each, Both]	117
§ 19C	[その他, 一般の形容詞]	121
§ 19D	[転移形容詞]	122
XII	比較の表現 = 形容詞・副詞(3)	126
§ 20A	[普通の比較級・最上級]	127
§ 20B	[否定のからんでいる場合]	131
§ 20C	[as . . . as の構文]	133
●		
XIII	時制について = 動詞(1)	137
§ 21A	[現在形]	138
§ 21B	[現在完了の代用として]	139
§ 21C	[「歴史的現在」]	141
§ 22	[進行形]	143
§ 23	[時の一致]	144

- XIV ————— 受動態をどう処理するか = 動詞(2) ——— 148
- § 24 ————— 【実例研究】 ——— 149
- § 25 ————— 【三つの対応策(1) — 能動で訳す】 ——— 152
- § 26 ————— 【三つの対応策(2) — 受身のまま】 ——— 154
- § 27 ————— 【三つの対応策(3) — 翻訳調を生かす】 ——— 156
- XV ————— 受動態をどう処理するか(続) = 動詞(3) ——— 158
- § 25'A ——— 【能動で訳す(1) — 自動詞を使って】 ——— 158
- § 25'B ——— 【能動で訳す(2) — 「は」を活用して】 ——— 159
- § 25'C ——— 【能動で訳す(3) — 主語と動作主を入れかえて】 ——— 160
- § 26'A ——— 【受身のまま(1)] ——— 161
- § 26'B ——— 【受身のまま(2)] ——— 162
- § 27' ——— 【翻訳調を生かす】 ——— 162
- § 28 ——— 【応用問題】 ——— 164
- XVI ——— 演習(4) = 受動態 ——— 169
- 
- XVII ————— 仮定法の問題点 = 動詞(4) ——— 181
- § 29 ————— 【主語に仮定がふくまれている場合】 ——— 181
- § 30 ————— 【副詞(句)に仮定がふくまれている場合】 ——— 183
- § 31 ————— 【Otherwise】 ——— 184
- § 32 ————— 【発想を転換する】 ——— 186
- 
-

XVIII	直接話法を生かす = 話法(1)	190
§ 33	【実例の検討】	190
§ 34	【直接話法を生かす】	192
§ 35	【混合話法・描出話法】	193
XIX	直接話法を掘り起こす = 話法(2)	200
§ 36	【直接話法を掘り起こす】	200
§ 37	【名詞(句・節)に応用してみる】	204
§ 38	【直接話法の問題点】	206
XX	演習(5) = 話法	210
XXI	強調構文その他 = 接続詞の問題点もふくめて	219
§ 39	【強調構文】	219
§ 40	【省略・共通構文】	221
§ 41A	【Till(Until)】	222
§ 41B	【Before】	223
§ 41C	【As】	224
§ 41D	【Except】	225
終章	何よりも大切なこと, 三つ	229
§ 42	【英語を知ること】	229
§ 43	【日本語を習うこと】	230
§ 44	【翻訳という仕事を愛すること】	232
	【索引】	234



## 序章一語順の問題そのほか

【§ 1—原文の思考の流れを乱すな】 文法の枠組に入る前に、まず、すべての前提となる点をいくつか最初に書いておきたい。その第一は、原文の思考の流れを乱すなということ——つまり、もっと具体的にいえば、原文で単語や句の並んでいる順序をできるだけ変えないで、頭から順に訳しおろしてゆくように心がけるということである。

もちろん、英語と日本語では、文の構成の仕方が根本的にちがうから、英文解釈の原則そのままに訳してゆけば、当然、原文の単語や句の順序を大いに乱して、うしろから前へ逆に訳し戻すという結果になってしまう。けれどもこうしたやり方では、非常に具合の悪いことがいくつも出てくる。抽象的な説明よりも、とにかくまず例文を訳してみよう。

<sup>1</sup>Mishima Yukio used to be fond of saying that Japan and the United States should have another war. <sup>2</sup>It took a war to make Americans interested in Japan, he said, and if there were signs that the interest was lagging, then the time had come for another war.

<sup>3</sup>He said it jokingly, of course, but there was truth in the part of the statement that gave the war credit for arousing American interest in Japan. <sup>4</sup>A great many Americans who had never paid much attention to Japan, and probably would

have gone through life ignorant of and uninterested in Japan, were required to take notice when the war came.

サイデンステッカー教授の、『日本と私』の冒頭の部分である。これを英文解釈流に直訳すれば、いったいどんな困ったことが出てくるか。全体を一度に扱ったのではややこしくなりそうだから、一つ一つ区切って検討してみることにしよう。

1—Mishima Yukio used to be fond of saying that Japan and the United states should have another war.

英文解釈流に直訳すれば、こんなことになるだろうか。

〈三島由紀夫はかつて、日本とアメリカはもう一つの戦争をすべきだと語ることを大いに好んでいた。〉

原文ではまず、「三島由紀夫は好んで語っていた」という意味の塊が来る。読者は当然、「ほう、どんなことを言っていたのだろう。三島のことだから、なにか逆説的な、痛烈なことなんだろうな」と期待する。そこで次に、「日本とアメリカはもう一度戦争をすべきだ」という、人をギクリとさせるような言葉がくる。そこで読者は、「なるほど、いかにも三島らしいな」と、先程の期待が満たされ、「しかし、それにしても、何故?」と、次の文章へ期待をさらにそそられる。と、はたして次の文章の冒頭には、前の文章の“another war”に接続して、“It took a war…”とつづいている。つまりこの「戦争」という一句を連結器にして、第一の文章から第二の文章へと、思考の流れはスムーズに、しかもダイナミックに受け渡されてゆくのである。

さて、そこで、もう一度、先程の「直訳」の例を改めて読み直して見ていただきたい。今説明したような、文章の背後にある思考の流れ、そのリズムなど、つまりは著者サイデンステッカー教授の技巧などは、跡方もなく消えうせてしまっている。まさに平板そのものだ。私なら、ここはこう「翻訳」してみたい。

〈三島由紀夫が、生前、好んで語っていたことがある。日本とアメリカは、もう一度戦争すべきだ。〉

2—It took a war to make Americans interested in Japan, he said, and if there were signs that the interest was lagging, then the time had come for another war.

ここの所でも、今も説明した理由で、英文解釈流に、まず「アメリカ人に日本に興味を持たせる……」で始めたくはない。ともかく「戦争」を原文どおり頭に出して——

〈戦争があつて、はじめてアメリカ人は日本に興味を持ち始めた。〉

これならば、「戦争」をクサビにして、第一の文章と第二の文章とがうまく繋がる。以下、こまかい説明は抜きにして、私の試訳だけを挙げると——

〈ところが今、その興味がおとろえている兆候が見えれば、もう一度戦争すべき時期が来ているのではないか、というのである。〉

3—He said it jokingly, of course, but there was truth in the part of the statement that gave the war credit for arousing American interest in Japan.

くもちろん冗談で言ったのだが、三島の説にも一半の真理はある。殊に、戦争のおかげでアメリカ人が日本に興味を持った、という点は当たっている。>

ここの所では、特に後半の、“that gave the war…”の関係代名詞節の扱いに注意していただきたい。かりにこれを直訳すれば――

くこの言明のうち、アメリカの日本への興味を起こしたという点で戦争をほめている部分>

といったことになるだろうが、これではもう、リズムとか技巧とかいうより前に、まずもって、日本語として意味がまともに通じるかどうかさえ怪しくなってくるだろう。

この点は、次の文章になるといっそう露骨になってくる。

4—A great many Americans who had never paid much attention to Japan, and probably would have gone through life ignorant of and uninterested in Japan, were required to take notice when the war came.

試みに、**a**直訳と、**b**翻訳(あくまで私の試訳だけれども)を並べてみよう。

**a**—く日本には大した注意は一度も払ったことがなく、おそらく日本については無知で興味のないまま生涯を過ごしていただろう非常に多くのアメリカ人は、戦争が来た時、注意せざるをえなくなった。>

**b**—く大部分のアメリカ人は、日本のことなど大して注意を払ったこともなく、そしておそらくは、日本のことなど何も知

らず、興味もないまま生涯を終わっていたにちがいない。ところがそういうアメリカ人も、戦争となってみると、いやでも日本に注目せざるをえなくなったのである。〉

両方を読みくらべてみていただければ、原文の思考の流れにできる限り忠実に従うということがいかに大事か、おのずから納得していただけるにちがいない。a では、長い長い修飾句が終って、ようやく主語（「……のアメリカ人」）が顔を出すまで、読者はいわば意味の無重力状態に宙づりになったまま、息をとめて待っていなければならない。いわゆる翻訳調のわかりにくさ、ぎこちなさの最大の原因となっているのは、まさにこの点の配慮のなさであることがきわめて多い。原文の構造に忠実であっても、原文の思考の流れには忠実ではなく、さらにはまた、日本語本来の文章の構成法にも忠実ではないからである。

さて、この節で書いたことを、ここで一応まとめておこう。

日本語の表現として自立できる訳文を得ようと思えば、その大前提として――

- (1) 原文の思考の流れにできるだけ忠実に従うように工夫するべきである。そのためには、
- (2) 原文の形式的な構造をなぞるのではなく、一度これを解体して、形式の背後にある思考の流れをよく読み取り、この流れを
- (3) 日本語本来の構造に移しかえて再構成しなければならない。

【§2—文体の問題】 前節で、原文の作者の技巧という問題にちよつと触れたし、またまとめでは、「日本語の表現として自立できる訳文」とも書いた。しかし、もしそうした問題に触れるのなら、当然、文体の問題が出てくるはずである。

文体のない文章というものはない。物には、単に形ばかりではなく、かならず色があるように、あるいは人の話には、字義的な意味内容ばかりではなく、かならず声音というものがあるように、文章には、いわばその地色として、文体というものがある。翻訳が、ただ英文解釈流に、原文の抽象的な意味内容を、いわばただヨコのものをタテに置き直すだけのものではなく、原文の表現性とでもいうべきものをトータルに再創造し、かつ日本語の表現として自立性を獲得しなければならぬとすれば、当然、原文の文体にたいする配慮、訳文の文体にたいする配慮を抜きにすることはできない。ある意味では、文体の問題は翻訳のアルファであり、かつまたオメガだということさえできるかもしれない。

けれども本書では、結論を先に言ってしまうえば、文体の問題は、原則としては取りあげないことにする。理由はいろいろあるけれども、最大の理由はこうだ。文体を論ずるには、ある特定の作家、ある特定のジャンル、ある特定の時代、あるいはまた、ある特定の翻訳の発表される特定の目的などを、十分に、複合的に考慮して、総合的に判断しなければならない。けれども本書が目的としているのは、そういう問題に入る前の段階として、短い例文を素材にしなが、英文直訳式のやり方から、

もっと日本語の構造や発想に忠実な翻訳へとオリエンテーションを試みる、そのプロセスの基本的なノウハウを、英文法の枠組を使って、できるだけ具体的、個別的に説明することなのである。

もちろん、厳密にいうなら、この段階であっても、文体の問題をまったく無視してしまうことはできない。早い話が、本書で私の挙げる訳例自体、できるだけ標準的な、いわば無色な文体を取っているが、それすら「無色」という、いわばマイナスの文体を持っているわけだ。けれども、一冊の本で、翻訳のあらゆる面をカバーすることなど望むべくもないこともまた、やはり事実だろう。この本は、あくまで今も説明した目的のための書物であって、そこへ中途半端にほかの問題を持ちこめば、かえって虻蜂取らずに終わってしまうおそれがある。要するに本書は、あくまで基本技の訓練のためのドリルであって、いざ実戦となれば、このほかに、単に文体の問題ばかりではなく、実にさまざまな問題が入ってくるということを、まず最初に念のためにお断りしておかなくてはならない。

【§3—文法のテキスト】さて次の章からは、いよいよ実際に翻訳のノウハウを、英文法の枠組に従って検討してゆきたいと思うが、やはり特定の文法書をテキストとして決めておいたほうが、何かと便利ではないかと思う。そこで、次の書物をわれわれの共通の台本ということにしておきたい。

江川泰一郎『英文法解説』（改訂新版，金子書房）

英文法というと、私などもそうだったが、学校時代、誰しもひどく退屈させられた記憶があるのではないかと思う。けれども、今になって思いなおしてみると、中学や高校時代、英文法が面白くないと感じたのは、まだロクに英語の知識がなかったからだったのではあるまいか。ある程度英語の知識が身についたから、特に、翻訳などを始めようという時になって、改めて英文法書を読み直してみると、実は非常に面白いことを再発見するものだし、大いに勉強にもなる。そして、そういう目的で読み返すには、江川さんのこの本は、非常にいい本だと思う。私自身、大学時代に読んで大変参考になった。よく読まれた文法書でもあって、私が大学時代に読んだ旧版も、昭和28年に初版、30年ですでに11版を重ねていた。39年に改訂新版が出て、54年までに実に53版に達している。学校文法の枠を一步踏み越えて、かなり突っこんだ記述も随所に見られるし、日本語との比較などにも注意がはらわれている。できれば手許に備えていただいて、英文法も復習しながら、この本におつきあいいただければ幸いである。

さて、そこで本書では、以下、江川さんの文法から借用した例文には\*印をつけて出所を示すことにしたい。快く借用をお許し下さった江川教授と金子書房に、改めてここでお礼を申しのべておきたい。

前置きが長くなってしまったけれども、さて、いよいよ次の第I章から、実地に練習を始めることにしよう。

# I. 所有格を考える — 名詞(1)

英文法の本を見ると、たいてい第1章はまず名詞。そして名詞の種類、用法から始まって、抽象名詞の普通名詞化とか、固有名詞の普通名詞化などという現象が説明してある。そして例えば、“She is a beauty.” とか、“He is the Newton of the age.” だとかいう例文が挙げてある。けれどもこういう種類のことは、いやしくも翻訳を志そうというほどの人ならば、当然知っているべきこととして、ここでは取りあげない。ここで取りあげるのは、あくまでも翻訳上、多少の注意を必要とする問題だけである。名詞について、こうした意味でまず取りあげなければならぬのは、やはり所有格の問題だろう。

【§ 4A—主語を表わす所有格】 例えば次の文章を見ていただきたい。

1—The dog's attempts to climb the tree after the cat came to nothing.\*

直訳すれば、ほほ次のようなことになるだろうか。

〈猫を追って木に登ろうとする犬の試みは無に帰した。〉

私ならこう訳したい。

〈犬は、猫の後を追いかけて何度も木に登ろうとしたけれど

も、無駄だった。>

この「直訳」から「翻訳」へ、発想の切りかえのポイントはどこにあるかといえば、それがつまり、“dog’s”という所有格の読み方であるわけだ。この所有格は、別に「所有」を表わしているわけではない。実は“attempts”の意味上の主語を表わしている。だからこの英文は、次のような文章を圧縮したものと考えられることもできる。

**The dog attempted to climb the tree after the cat, but the attempts came to nothing.**

少なくとも訳す時には、一度まずこう読みほどこいてから訳すのがよい。

ちなみに“attempts”という複数形について、ひとこと付け加えておきたい。日本語では、文法上の「数」の観念は事実上ないに等しいから、英語の複数を無理に訳文に持ちこもうとすると、訳文に無用の負担をかけることになる場合が多い。例えば今の場合なら、「木に登ろうとする犬の何度もの試み」というようなことになって、訳文のぎこちなさを確実に倍増させることになってしまう。大抵は無視してさしつかえないだろう。しかし、上の訳文の「何度も木に登ろうとした」のように、発想を転換して、別の形で実質的に原文の複数形を日本語に移すこともできる。そのためにも、名詞をそのまま名詞に訳すのではなく、“The dog attempted to climb.” というように、文章の形に読みほどこいてやるのが有効だ。そうすれば、原文の複数形を、副詞を

使って移し変えることもできるからである。

この「主格関係」を表わす所有格については、江川さんの『英  
文法解説』では 14 ページ, § 10 B に説明してある。江川さんの  
挙げている例文を借用して、この点をもう少し練習しておこう。

2—**The teacher's absence** provided a good opportunity for  
the pupils to get into mischief.\*

「先生の不在が……」では訳にならない。まず、“**The teacher  
was absent, and that provided a good opportunity …**”と読  
みほどく。それから訳に取りかかれば、自然に相応の訳文が出  
てくるはずだ。

〈先生がいなかったので、これ幸いと、生徒たちはいたずら  
を始めた。〉

あるいは——

〈先生がいなくていいことに、生徒たちは早速ふざけ始め  
た。〉

3—**The Norman's conquest of England in 1066** had a great  
effect on the English language.\*

これをもし、「1066年のノルマン人のイギリスの征服は……」  
とやたとすれば、誤訳ではないにしても、拙訳の典型として  
みごとな例を提供してくれることになるだろう。学校文法的な  
意味では、一応形式的に原文に対応してはいるけれども、肝心  
の訳文の意味するところがサッパリわからない。ここはどうし  
ても、先程からいう手続きを踏んで——

〈1066年にノルマン人がイギリスを征服したことが、英語に大きな影響を与えた。〉

ないしは——

〈1066年、ノルマン人はイギリスを征服した。やがて、英語に大きな影響を及ぼすことになる事件であった。〉

とでも訳したい。

【§ 4B—代名詞の所有格】 ところで代名詞の所有格についても、名詞の所有格の時と同様の現象があることは言うまでもない。この章では名詞が主な話題だけれども、代名詞の所有格についても、ここでついでに触れておくほうが便利だろう。

1—**His failure** to fulfil the promise made the voters suspicious.\*

→ He failed to fulfil the promise, and that made...

〈彼は公約を実行しなかった。そこで有権者も彼を信用しなくなった。〉

2—**His admiration** for her beauty blinded him to her faults.\*

→ He admired her beauty...

〈彼は彼女の美貌に心を奪われたあまり、欠点は目に入らなくなっていた。〉

3—**Their resemblance** was so close that they were obviously sisters.\*

→ They resembled each other so closely...

〈二人は実によく似ていたもので、姉妹だということはすぐにわかった。〉

【§ 4C—動名詞の意味上の主語】 名詞や代名詞が動名詞の意味上の主語を表わしている場合には、「主格関係」はわざわざ指摘するまでもなく明らかだろう。

| 1—There's no harm in **Evie's writing** a book. |

〈別に、エヴィーが本を書いていけないわけはなかろう。〉

| 2—I don't know why she didn't like **my saying** that. |

〈私がそのことを口に出すのが、どうして彼女の気に入らなかったのか、わからない。〉

【§ 4D—of+名詞(主格関係)】 もう一つ、これはむしろ前置詞の問題かもしれないが、所有格との関連で、of+名詞の形にも、ここで触れておいたほうがいいだろう。

A of B という構造で、B が意味上、A の主語となっている場合がある。例えば——

| 1—Do you believe in **the existence of ghosts**?\* |

→ Do you believe that ghosts exist?

〈幽霊がいるなどと、君は本気で信じているのか?〉

| 2—They were all surprised by **the sudden coming in of a stranger**. |

→ ... a stranger came in suddenly.

〈知らない人がいきなり入って来たので、みな驚いた。〉

3—He married without the knowledge of his parents.\*

→... his parents didn't know

〈彼は、両親の知らないうちに結婚していた。〉

【§ 5A—「目的格関係」を表わす所有格】 さて、§ 4 で見てきた名詞・代名詞の所有格、of+名詞のどれについても、「主格関係」ではなく、「目的格関係」を表わす場合がある。例えば——

1—The city's capture by the guerrilla bands threw the neighboring areas into great disorder.\*

という文章で、“The city's capture”が「町が占領した」の意味でないことは明らかだ。“The guerrilla bands captured the city, and that threw...”と読みほどこいてやらなければならない。そこで訳文は——

〈ゲリラ部隊がその町を占領したので、周辺の地域は大混乱に陥った。〉

あるいは受身の形にして——

〈その町はゲリラ部隊によって占領されてしまった。当然、周辺地域は大混乱に陥った。〉

とでもすべきだろう。

代名詞の例を挙げると——

2—He heard the Austrians shout themselves hoarse with joy as they acclaimed **their conqueror**. — Maugham, *Up at the Villa*.

この引用だけではわかりにくいかもしれないが、この “their conqueror” というのは、前後関係からして、“the man who had conquered them (=the Austrians)” の意味である。すると——

〈彼は、オーストリア人たちが声をからして、彼らを征服した男を歓呼して迎えるのを聞いた。〉

とでもいうことになる。ただし、この訳文はもう一工夫する必要があるかもしれない。相手は、ほかならぬオーストリアを侵略した征服者であるにもかかわらず、群衆はこの男を歓呼して迎えている、という、肝心のアイロニーが十分読み取れないからだ。この点を考えると、例えば——

〈彼の耳には、オーストリア人たちが声をからして歓呼するどよめきが聞こえてきた。だが、群衆が今狂喜して迎えているのは、ほかならぬ彼らの母国を征服した男ではないか。〉

といった訳はどうだろう。

【§ 5B—of+名詞(目的格関係)】 だが実は、(代)名詞の所有格が「目的格関係」を表わす場合は、実はそれほど多くはない。いちばん多いのは、of+名詞でこの関係を示す例である。早い話、前の節で挙げた例文の中にも、すでにこの形が出ている。§ 4 A 3 の、“The Norman’s conquest of England...” の、“of England” がそれである。

ほかにもいくつか例文を加えておこう。

1—Violation of the rights of others was the last thing he would do.\*

| → To violate the rights of others... |

〈他人の権利を侵害するなどということは、彼がけっしてしないことであつた。〉

| **2—Ignorance of social usage can result in many blunders.** |

これは例えば、次のような文章に読みほどいてやればよい。

| If you are ignorant of (or If you don't know) social usage, it can result... |

こう考えれば、自然に次のような訳文が出てくるだろう。

〈社会的慣習を知らないと、とんでもない失敗に終ることがよくあるものだ。〉

あるいは——

〈慣習を知らないばかりに、思わぬ失敗をすることもめずらしくはない。〉

ついでながら、§ 4 A で触れた複数の問題が、ここにも顔を出していることに御注意いただきたい。“many blunders”を「多くの失敗」と訳すのは、いかにも翻訳くさくて味気ない。けれども今言うように、“Ignorance of social usage”を副詞的に読みほどいてやれば、上の訳文で示したとおり(「……よくある」, 「めずらしくはない」), 発想の転換の糸口も出てこようというものだ。

最後にもう一つ、主格の所有格と、目的格関係の of~が両方出てくる例を挙げておこう。

| **3— Ibsen's advent coincided with the movement for the** |

| liberation of women from the inferior position.\* |

“Ibsen’s advent” が「主格関係」，“the liberation of women” が「目的格関係」を表わしていることは言うまでもない。すると訳は——

〈イブセンが現われたのは、たまたま、女性を低い地位から解放しようとする運動と時を同じくしていた。〉

それとも——

〈イブセンが登場した時期は、女性を低い地位から解放しようとする運動の始まった時期と一致していた。〉

#### 〈練習問題〉

さて、この章のしめくりとして、少し長めの文章を、練習問題として出しておくことにしよう。できれば読者の方々も、ただ読み流すのではなく、御自分でもペンを取って、まず訳文を書いてみていただきたい。

Shakespeare was all the better for his lack of university education. For the effect of such an education is, all too often, the stifling of genius. What is unique about Shakespeare is his closeness to his native soil, and to the heart of his people, with their memories of “merry England”. Such closeness may well have been spoilt by a university education.— P. Milward, *Culture in Words*.

#### 〔コメント〕

名詞の所有格そのものが出てこないのはやや残念だが、代名